

母子に関わる看護職者向けの母乳育児支援プログラムの開発およびその効果の検討

布原佳奈 服部律子 谷口通英 堀内寛子 名和文香 宮本麻記子 大法啓子 (大学)
高田恵美 高田恭宏 (高田医院)

はじめに

2003年に母乳育児支援ガイド¹⁾が発刊され母乳育児支援に関わる専門家向けに世界共通のガイドラインが示されている。しかし、「赤ちゃんにやさしい病院」(Baby Friendly Hospital:以下BFH)に認定された一部の先進的なクリニックや助産院を除いて、依然として規則授乳や日令に準じた人工乳を補足する授乳指導が行われているのが現状である。平成17年度乳幼児栄養調査²⁾によると、妊婦の52.9%ができれば母乳で育てたい、43.1%が是非母乳で育てたいと考えており、計96%が母乳で育てたいと希望している。しかし、出産後3ヶ月の時点で実際に母乳育児が確立している母親は38%であり、妊娠中から卒乳までの継続的な支援が求められている。

なお、WHO/UNICEFは母乳育児成功のための10か条³⁾を長期にわたって実践している施設をBFHに認定しており、岐阜県内での認定施設は2施設のみである。

これまでの取組み

<H16年度>

県内の母乳育児支援の実態調査を実施した。「母乳育児を推進している施設」と「どちらかと言えば母乳育児を推進している施設」には、取組み内容、母乳率に差のある傾向が明らかにされた⁴⁾。

<H17年度>

赤ちゃんにやさしい病院の利用者によるケアの評価について調査を行った。その結果、妊娠中から情報提供をすること、入院中は夜間でもそばについて授乳指導があること、褥婦の自信を高めるような関わり、退院後では早期からのサポートが大切であることが明らかになった⁵⁾。

H17年度の共同研究報告と討論の会では、参加者より母乳育児支援に自信がなく、従来どおりの指導をしている、他施設の看護職者と情報交換したい等の意見があった。

I. 目的

本研究の目的は、1. 岐阜母乳の会と共に岐阜県の母子に関わる看護職者向けの母乳育児についての現任教育の内容を検討する、2. 検討した現任教育を実施し、母乳育児について学びつつ、それぞれの現場のもつ課題を共有することの効果を検討することである。

II. 方法

1. 現任教育の検討: 昨年の討論の会でのディスカッション、岐阜母乳の会が主催した講演会における参加者の反応をもとに、参加者のニーズの観点から内容、方法について共同研究者で検討し、メールのやり取りにて修正を加えた。

2. 現任教育の効果の測定: 現任教育をワークショップ形式で開催した。以下、現任教育をワークショップとする。グループディスカッションの内容について共同研究者で分析を行った。ワークショップ終了後に、評価のための質問紙調査を行った。

3. 調査参加者: ワークショップの参加者およびその後の評価のための質問紙調査への同意が得られた看護職者

4. 倫理的配慮: 本研究は、本学研究倫理審査部会の承認を受けている。ワークショップ後の調査では、文書を用いて調査の趣旨を説明し、参加は自由意思であること、個人が特定されないこと、データの管理について説明し、同意書の提出をもって意思確認した。

5. 現地側の取組み体制: これまでに岐阜母乳の会で開催した講演会等の参加者の反応をもとに現地側と大学側が協同してワークショップの内容を検討した。現地側の研究者は、BFHの取組みの実際について講義し、会場からの質問に母乳育児の専門職の立場から応じた。またグループディスカッションにもメンバーとして参加し、スタッフ教育のあり方、退院後のサポートについて話し合った。共同研究報告と討論の会に参加し、参加者からの質疑に応答した。

Ⅲ. 結果

1. 現任教育の検討

1) ねらい

対象：県内で母乳育児に関わる看護職者

- ・ 県内の身近なモデルである赤ちゃんにやさしい病院の実践活動を知る。
- ・ 母乳育児の背景にある理論を知る。
- ・ 組織的に母乳育児支援に取り組むきっかけになる。
- ・ 日頃、困っていること、工夫していることを気軽に話し合い、情報交換できる。

2) 方法：講演会とグループディスカッションを含むワークショップ形式で行うことにした。

3) ワークショップのプログラム

(1) 講演会の内容(85分)：

- ①赤ちゃんにやさしい病院 イニシアティブ：
高田医院 助産師・IBCLC（国際認定ラクテーション・コンサルタント）高田恵美
- ②母と子どもの関係から母乳育児を見直そう：
看護大学 谷口通英
- ③母乳育児を組織的に取り組むために SWOT 分析の紹介：看護大学 布原佳奈

なお、SWOT 分析とは、状況を強み、弱み、機会、脅威の4つの観点から分析する方法である。

(2) グループディスカッション(60分)：

県内の母乳育児支援に関わる看護職者の情報の共有および課題の明確化を目的に小グループによるフリーディスカッションの時間を1時間とった。

2. ワークショップの状況

1) ワークショップ参加者の属性

表1のとおり、助産師が半数以上を占めていたが、看護師、保健師の参加があった。

表1 ワークショップの参加者の属性

職種	人数
保健師	2
看護師	4
助産師	24
看護学生	7
教員(助産師)	6
計	43

2) グループディスカッションについて

6グループに分かれて和やかな雰囲気の中、フリーディスカッションが行われた。ディスカッションの内容を分類したところ、以下の3カテゴリーに分類された。困っていること・課題および知りたいことについては、グループメンバ

一間で情報交換し、解決に向けてのヒントを得ている場面が多くみられた。

(1) 困っていること・課題

- ・ 病棟では従来からの授乳指導が続いており個人レベルでは新しいやり方を取り入れるのは難しい。(クリーンコットン中止など、エビデンスに基づいたケアの取り入れ)
- ・ スタッフのモチベーションを上げる方略
- ・ スタッフ間の意見の相違への対応
- ・ 看護職と医師、産科と小児科の認識の相違
- ・ 退院後の母乳育児支援について(母乳育児と補完食との関係。早期に離乳食を勧められて、母乳分泌がダウンしてしまった)
- ・ BFH 取得に向けての課題(母乳育児を支援するグループ作り、事務職員の理解、混合病棟における取組みの難しさ)

(2) 知りたいこと

- ・ NICU での母乳育児支援の方法(低出生体重児の母親は搾乳をする必要があるが、勧めるとストレスになるのではないかと。搾乳を楽しくやるための援助はないか。ベビーだけがNICUに搬送される例も多く、母子分離の中の支援方法がわからずスタッフのモチベーションも低い)
- ・ 母乳育児の希望が強いにも関わらず、乳児の体重増加が思わしくない場合の対応(何を基準に判断したらよいかかわからない。卒前教育ではそこまで習っていない)
- ・ 搾乳器の適切な使用方法
- ・ 母乳分泌の少ない時期の補足の考え方
- ・ 妊娠期の乳房チェックの必要性について

(3) 工夫していること、取組み

- ・ 母子保健連絡会議があり助産師と保健師が情報交換をしている。
- ・ 母乳外来の活用方法(母乳育児支援外来があり、全員参加してもらえるように利用券を渡し、他院で出産した母親も受け入れている。退院後、1週間目に電話訪問、2週間に来院してもらっている)
- ・ 母児同室にしてから母乳率が30%上がり、一ヶ月健診でも下がらない。
- ・ 伝統の技(飲ませ方。乳房緊満時の対応。乳管開通について)
- ・ 母乳育児継続のための家族への支援(祖父母の前で意図的に指導している。家族に見守りをお願いしている)
- ・ 母乳育児に向けての母親への教育(最初は分泌が少なく吸われることで出るようになる

ことを教え、無用な落ち込みを避けるようにしている。「できれば母乳で」を「是非母乳で」に意識をアップさせたい)

- ・母乳育児についてスタッフのモチベーションを上げる方略（まずはトライアルでやってみる、看護師にできること、助産師にしかできないことを区別して業務整理する。よいケアをしてセルフケアレベルが上がると、逆にトラブルが減少して手がかからなくなり、母親からもよい反応が得られる。)

3. ワークショップに対する参加者の評価

- 1) ワークショップ後の質問紙調査の参加者
助産師が全体の 7 割弱であったが、看護師、保健師の参加もあり計 29 名であった(表 2 参照)。調査参加者の臨床経験年数は 6 年未満と 6 年以上がおおよそ半数ずつであった(表 3 参照)。
- 2) ワークショップの参加動機
母乳育児に対する学習ニーズ 16 名と一番多く、次いで他施設との情報交換を求める者が 13 名であった(表 4 参照)。

表 2 ワークショップ後の調査参加者の属性

職種	人数(名)
保健師	1
看護師	3
助産師	19
看護学生	6
計	29

表 3 調査参加者の臨床経験年数

臨床経験年数	人数(名)
なし	6
3 年未満	4
3 から 6 年未満	3
6 から 10 年未満	6
10 年以上	9
無回答	1
計	29

3) ワークショップの時期および構成

ワークショップを開催した時期については全員が適切であると回答した。しかし、5 名が時間配分を変更した方がよいと回答しており、5 名全員から時間を長くしてほしいとの希望があった(表 5 参照)。

表 4 ワークショップの参加動機(複数回答あり)

内容	人数(名)
母乳育児について知りたかった	16
母乳育児に携わる他施設の看護職者との情報交換	13
BFH の活動について興味があった	8
ワークショップ形式で学習できるから	6
母乳の会と看護大学との共催企画だから	6
その他	5
計	29

表 5 ワークショップの時間配分

内容	人数(名)
適切であった	22
変更した方がよい	5
無回答	2
計	29

4) ワークショップ内容の評価

(1) 講演について

「赤ちゃんにやさしい病院 イニシアティブ」「母と子どもの関係から母乳育児を見直そう」「母乳育児を組織的に取組むために SWOT 分析の紹介」について、ほぼ全員から参考になったとの評価を得た(表 6・7 参照)。参加者の意見としては以下のとおりであった。

- ・実際の行動のレベルがわかった
- ・うちの病院でもできることから取組んでいきたいと思った。(たくさんできそうなことがあったので)
- ・目からうろこでした。勤務している病院スタッフに、戻って報告しようと思う。
- ・自施設の現状にショックを受けた。とてもよい活動だと思う。
- ・産褥期の母親(女性)の状況、及び心理が系統的に理解できた。
- ・SWOT 分析はぜひ使用してみたい。
- ・意欲を持つスタッフがおかれている環境を分析して、取組んでいくことの大切さを痛感した。

(2) グループディスカッションについて

ワークショップで十分に情報交換ができたという回答した者は 6 名のみであった。ワークショップ終了後も会場で交流を深めている参加者も多くみられた(表 8 参照)。

(3) ワークショップ全体について

約 90%の参加者がワークショップを通して課

題に対する手がかりや方向性が得られ、全員がまた参加したいと回答していた(表 9・10)。参加者の意見としては以下のとおりであった。

- ・助産師ばかりでなく、看護師、保健師がいてさまざまな意見、観点が聞けた。
- ・さまざまな施設での取組みが聞けて、実践しやすい。
- ・他施設の情報を得ることで、自施設を客観的にみることができる。
- ・アットホームでいろいろ話ができてよかった。
- ・モチベーションが高まる。

表 6 赤ちゃんにやさしい病院インシティブの評価

内容	人数(名)
参考になった	14
とても参考になった	14
無回答	1
計	29

表 7 母と子どもの関係から母乳育児を見直そう及び母乳育児を組織的に取組むために SWOT 分析の紹介の評価

内容	人数(名)
とても参考になった	14
参考になった	13
あまり参考にならなかった	1
無回答	1
計	29

表 8 グループディスカッションでは情報交換ができたか

内容	人数(名)
情報交換できた	22
十分に情報交換できた	6
無回答	1
計	29

表 9 ワークショップを通して課題に対する手がかりや方向性をつかめたか

内容	人数(名)
得られた	17
かなり得られた	9
無回答	3
計	29

表 10 また参加したいか

内容	人数(名)
参加したい	15
是非参加したい	14
計	29

4. 自施設で取組みたい課題

- ・ 出産後、30分～45分以内での直接母乳開始
- ・ 母児早期接触、カンガルーケアの実施
- ・ 出生直後からの24時間母児同室
- ・ 母乳育児の意欲が持続できるような NICU での関わり
- ・ 小児科医との連携
- ・ 混合栄養から母乳に移行する時の援助
- ・ 母乳育児確立までの支援
- ・ 家庭訪問など、退院早期のサポート
- ・ 母乳育児をあきらめる母親の要因を明らかにして、課題をしっかりと捉えてみたい。(人工乳のみの母親は少ないが、混合が多く、4ヶ月児健診後、母乳のみ、ミルクのみのどちらかに分かれるのが主になっている)
- ・ 母乳外来の開設
- ・ 祖父母への教育
- ・ 院内学習会の充実
- ・ スタッフ間の支援の意気込みを確立、目標を定める。

5. 現地側の受け止め

大学とつながることで、助産師だけでなく、母乳育児に関心をもつ保健師や看護師との意見交換ができた。自施設以外の課題がわかった。将来の母乳育児支援を担う看護・助産学生の参加は意義が大きい。

6. 実践の改善

まだ各施設における直接的な実践の改善は確認できてはいない。しかし、今回のワークショップを通して BFH の具体的な取組みを知ったこと、他施設との情報交換ができたこと、看護 3 職種それぞれの立場を理解することができたと考えられた。母乳育児支援に関わる看護職者がエンパワーされ、自施設の課題を再認識し、課題に取り組むモチベーションが高まることで、今後、実践の改善につながると考えられた。

IV. 考察

ワークショップの講演の内容、グループディスカッションにより現場のもつ課題や工夫点を

共有できたことに対し、参加者より概ね肯定的な評価を得た。しかし、このことが実践の改善につながったかどうかの評価はこれからの課題である。

現在、岐阜母乳の会は年 2 回、講演会を主催しており県内の母乳育児に関わる医師、看護職者および母親が積極的に参加し、母乳育児に関する最新の知見を得る機会がある。

本ワークショップの役割は、①身近で具体的な実践例の紹介、②他施設との情報交換、③看護 3 職種それぞれの立場からの意見交換、④母乳育児に関わる看護職者のネットワーク作りがあり、これらを通して、学んだことを現場で実践に移す足がかり的存在となることである。

今回のグループディスカッションより、母乳育児支援に取り組む看護職者であっても抱える課題は多様であったため、次年度は NICU における取組み、家族への支援などテーマを設定し、議論を尽くす方法を検討する必要がある。今回の評価をもとに次年度もワークショップを継続して開催する予定である。

< 次回のワークショップの案 >

○講演 (90 分) :

- ・赤ちゃんにやさしい病院の活動紹介
- ・少しでも改善しようとしてがんばっている施設の組織的な取組みの実践例
- ・NICU での母乳育児支援

○グループディスカッション (90 分) :

○発表 (15 分)

V. 共同研究報告と討論の会での討議内容

1. NICU での母乳育児支援について

- ・低出生体重児にとって母乳は重要であるので、母乳の分泌が少ない時期には綿棒や注射器を使用してわずかであっても児に与えるようにしている。NICU には看護師しか配置されていないため、分からないことも多く、スタッフの意識作りや勉強会をする予定である。退院後のフォローが課題である。
- ・小児科医の母乳への理解がある。NICU では母乳を推進し、乳房の状態もよく観察しているが、精神的ストレスにならないように考慮している。特に退院後の自己搾乳が大変であり、精神的フォローが必要である。
- ・産婦人科に母乳外来があるが、スタッフは日替わりで、乳房マッサージの資格がある者でもない。技術面で課題はある。また母体搬送などで遠方から来ている方も多く、退院

後、遠方や、地域の助産院などにどうつなげていくかも課題である。

- ・児が NICU 管理となり母子分離になった場合、子どもがそばにいない状態で搾乳を継続し、母乳分泌を促進するセルフケアを続けていく難しさがある。低出生体重児ならではの情報提供を行い、単なる搾乳ではなく、直接母乳を目指したおっぱいづくりという位置づけで支援をしている。低出生体重児を産んだからこそ母乳をがんばりたいという母親の気持ちを支える肯定的な関わりが必要である。母親の意欲の低下しやすい時期をねらって効率よく介入し、業務をそれほど増やさずに支援することも可能である。母親が NICU に来るまでの産科病棟での乳房ケアも大事である。

2. 帝王切開後の母親への母乳育児支援について

- ・ハイリスク分娩を多く扱っており、スタッフが母乳育児支援に十分に関わることが難しい状況である。特に帝王切開の場合、母親が NICU へ行くところに乳房の緊満がみられて授乳が難しい状況になりやすい。
- ・ハイリスクとローリスクでは同じ扱いはできないが、帝王切開であっても母乳育児に向けて産褥早期からできることはある。例えば手術室内での直母、できるかぎり母児を引き離さないようにし、赤ちゃんをなぜる、歌を歌うなど、母親として赤ちゃんのためにできることをしてあげたいという気持ちを大事にしたケアが有効である。

3. 補完食について

- ・母乳を惜しみなく飲ませながら卒乳までの間に栄養必要量を満たすために補完食という考え方が広まりつつある。厚生労働省が授乳・離乳支援ガイド(案)を作成し、今、パブリックコメントを求めているので、自分たちの意見を反映させるよい機会である。

4. 育児支援における施設と地域の課題

- ・保健師として家庭訪問で出会う事例の中には、母乳育児に熱心な病院で出産し、本人としては一生懸命取り組んだが結果的に混合栄養になった場合、母親としての自尊心が低下していたことがあった。母乳育児に関する勉強会開催して、医療機関と地域が連携して母乳育児に取り組む体制をつくりたい。

文献

- 1) UNICEF/WHO : Breastfeeding Management and Promotion in a Baby-Friendly Hospital: an 18-hour course for maternity staff, 1993, 橋本武夫, 母乳育児支援ガイド;医学書院, 2003.
- 2) 厚生労働省 : 平成 17 年度乳幼児栄養調査, 2007-02-20, <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/06/h0629-1.html>
- 3) 前掲 1)
- 4) 服部律子, 谷口通英, 堀内寛子他 : 岐阜県における母乳育児支援の実態調査, 平成 16 年度共同研究報告書 ; 56-60, 2005.
- 5) 服部律子, 谷口通英, 堀内寛子他 : 施設・地域における母乳育児支援の課題と方法に関する研究, 平成 17 年度共同研究報告 ; 83-88, 2006.